

ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書

京都大学文学研究科博士課程2年 横田 悠矢

今回の派遣は、ハイデルベルクおよびストラスブールの研究機関を視察するとともに、両大学の学生・院生の議論や交流を通じて研究生活やヨーロッパの情勢について意見交換を行うことのできる貴重な機会であった。ハイデルベルクに関しては他の参加者の報告書に譲り、以下ではストラスブールでの日程に言及する。

ストラスブール大学日本語学科では、学士課程から博士課程まで多くの在籍生と交流を行った。日本から帰国して間もない、あるいは今後日本留学を控えているという院生も少なくなく、学科全体としての留学志向の高さが窺われた。また各人の関心についても、日仏翻訳や民間信仰、駅の建築構造など幅広く認められている点は特筆に値する。

ワークショップでは、移民・難民問題を背景に近年深刻な問題となりつつある「グローバリゼーションのなかのナショナリズム」が議題となり、ソフト・パワーとミリタリズムの関係や日本国憲法第9条、ヘイトスピーチ、食文化とグローバリゼーションの結びつき等について議論が行われた。とりわけ差別的発言に対するヨーロッパでの厳格な規制、表現の自由と倫理的判断との境界、漫画やアニメ等の文化が内包する潜在的な脅威といった論点が印象的だった。

市内見学ではストラスブール大学日本語学科のサンドラ・シャル先生とアルザス地方の伝統料理をご一緒したほか、ストラスブール司教の宮殿であったロアン宮（美術館、考古学博物館、装飾美術館）やストラスブール大聖堂、プチット・フランス等を訪れた。またフランスで唯一の国立兼大学図書館を訪問し、貴重書が収められた一般非公開の書庫を含めて、職員の方から施設のご説明を頂いた。

今回の派遣を通して、時事に係る問題意識の重要性を再認識した。報告者は現在パリに留学中であるが、ヨーロッパにおける移民・難民問題や、大統領選挙を間近に控えるフランスを含めた諸国の右傾化を身近に感じるにつけ、一連の動向への疑念は深まる一方である。現状に対する解決策が模索されるなかで、文化越境研究の意義はいつそう高まりつつあると言える。

文化越境という意識が広く共有されてゆくためにも、今後多くの学生・院生が盛んに行き来し活躍することで、京都大学とハイデルベルク・ストラスブール両大学との提携がさらに強まることを期待している。